

2020年6月28日 大井バプテスト教会 礼拝説教
説教題「主を喜び祝うことこそ」ネヘミヤ記7章72b～8章12節

主任牧師 加藤 誠

「総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは…民全員に言った。…『今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である』」（ネヘミヤ8・9、10）。

「分散礼拝」という形ではありますが、久しぶりにこのように教会に共に集い、皆さんの顔を見ながら一緒に礼拝できることを心からうれしく思います。

約三か月間、毎週日曜日の朝、この三階チャペルで教役者だけで礼拝をささげ、それをインターネットで配信するという形をとってきました。感染防止を考えると奉仕者をお願いすることができないので、わたしか広木先生が説教あるいは録画担当、菊地先生が奏楽担当という礼拝でした。一人でカメラに向かって説教しながら思ったことは、これまでの礼拝で、どれだけ会衆の皆さんや聖歌隊の賛美、また祈りに支えられていたか…ということです。一人で説教し、一人で賛美歌を歌うことは、思った以上のエネルギーを要します。たった30分の礼拝なのにへとへとです。今日は、賛美歌を声を出して歌うことができないわけですが、それでも指揮者が立ち、奏楽者がいる。何よりも会衆の皆さんの顔が見える。一緒に祈りを合わせる友の顔が見える。共に集い合ってささげる礼拝の力というものを深く感じています。

神さまに礼拝をささげることは、大勢集まらなければ成り立たないというものではありません。一人でも礼拝は成り立ちます。教会の礼拝堂でなくても、家でも、職場でも、公園でも、病室でも、礼拝は成り立ちます。どこでも、いつでも、神さまに礼拝をささげることはできるのです。

にもかかわらず、なぜ私たちは共に集って礼拝をささげるのでしょうか。

皆さんそれぞれにこの三か月、日曜日、教会に集う礼拝の意味を考え、思い巡らして来られたことと思いますが、先日、ある方がこのように言われていました。

「最初のうちは緊張してパソコンの前に座っていたけれど、家の電話が鳴るとつい出てしまうことがあって、『これは違う！』と思うようになった。自分の日常を後ろにおいて神さまを第一に選び取り、教会に集い合う礼拝がやはり大切なのではないか。家ではつい自分の都合中心になり、自分に心地よい言葉しか受け取らない。でも教会に来ると、これだけいろんな個性、考え方の違う人たちが、それでも一緒に神さまを真ん中にして礼拝する。その礼拝に大切なものがあるように思う」。

日常を置いて神さまの前に出る。神さまにささげる部分を明確にする。そうでないと、わたしたちはすぐ自分の都合にあわせて、第一のことと、それ以外のことをぐちゃぐちゃにしてしまう弱さを持っているのではないのでしょうか。

もちろん共なる礼拝に出られない時もあるわけですが、その時にもそれぞれ置かれた場所で、教会の礼拝時間を覚えて祈りと賛美を合わせることが、一人ひとりの信仰を強めてくれるように思います。

以前の教会で、90歳を過ぎたSさんという方がおられました。晩年は病院のベッドに寝ておられることが多かったのですけれども、Sさんのお見舞いに何うと、手に大きな腕時計をしているのです。病室には不釣り合いな大きさの腕時計でした。「この腕時計、ずいぶん大きいですね」と言いますと、Sさんはこう答えました。「この腕時計を見ながら、日曜日、教会の礼拝を思い、ここで祈りを合わせるのです。あ、いま、奏楽が始まったな。聖歌隊が講壇の上に座ったな。みんなで声を合わせて交読して、賛美歌が大きな声で歌われているだろうな…」と。Sさんはベッドの上で教会の礼拝につながり、一緒に礼拝をささげている。その信仰が、Sさんをベッドの上で確かに支えているのだな…と、ひしひし示されたのでした。

私たちは「一人」で礼拝をささげなければならない時にも「独り」ではないのです。イエス・キリストにおいて、聖霊において、教会の共なる礼拝につながられているからです。そして、教会の礼拝に大切につながる一人ひとりの祈りが、キリストの教会を建て上げていくのではないのでしょうか。

今朝はネヘミヤ書8章を開きましたけれども、ここでエルサレムの町に集まり、礼拝をささげているのは、約70年間のバビロン捕囚から帰って来たイスラエルの人々です。「第七の月になり、イスラエルの人々は自分たちの町にいたが、民は皆、水の門にある広場に集まって、一人の人のようになった」（7:72～8:1）。

バビロン捕囚から故郷に戻った時、人々はまず自分の町に帰り、自分の生活の再建にとりかかりました。その人々がしかし、いつまでもこのままではいけないと、エルサレムに「一人の人のように」集ったのです。3節によると人々は「夜明けから正午まで」、聖書の朗読に耳を傾けています。何という集中力でしょうか。人々の、礼拝にかける真剣さに圧倒されます。そこには廢墟となった神殿があり、人々は聖書の朗読と解説を聞きながら「泣いていた」（9節）とあります。いったい何を涙したのでしょうか。自分たちの民族の歴史、せつかく神から与えられた約束の地を失い、大きな苦難をなめた約70年の捕囚の歩み。その間、異国の地で亡くなっていった家族、友人たちを想うとき、涙を流さすにはおれなかったのではないのでしょうか。

その人々にネヘミヤとエズラは語りかけます。「今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。主を喜び祝うことこそ、あなたがたの力の源である！」（10節）と。

主の日は、神さまにささげられた聖なる日なのです。わたしの日ではない。趣味やリフレッシュのためにも使う日であるとしても、第一にはまず神さまの日なのであり、神さまにささげる日なのです。その第一のことを覚えるために私たちは礼拝に共に集うのです。そのとき、主を喜び祝う礼拝が、一人ひとりの力の源となる。なぜなら礼拝は神さまから喜びだからです。神さまの愛につながられ、イエス・キリストにおいて語られた平和と希望の言葉をいただいでいく喜びの場だからです。私たちはそれぞれの暮らしの中に、家族のことや仕事のことなど、いろいろな課題／重荷をいただいているわけですが、その一人ひとりにインマヌエルの主であるイエス・キリストが恵みをもって伴ってくださっている。この喜びの福音こそ、私たちが生きる力の源だからです。

それゆえ、それぞれの家庭や職場、公園や病室でささげられる礼拝と共に、主の日に、教会に共に集い合う礼拝を大切に大切にささげていきたいのです。